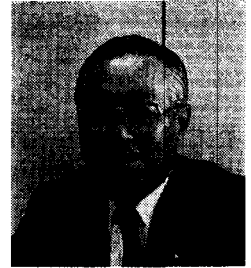


## アナポリスにて

新日本製鐵(株) 副社長 山根 眞樹生



昨年11月の初め、アナポリス米国海軍兵学校を訪問する機会を得た。短い時間であったが、念願を果たすことができ、その時の印象・感概は今なおこの胸に強く、熱く残されている。

同校は、1845年、チェサピーク湾に面したセバーン川河口のアナポリスに「海軍学校 (NAVY SCHOOL) として設立された。それは私が学んだ江田島の開校に先立つこと43年前(ただし、築地の海軍操練所から数えると19年前)のことになる。1850年「海軍兵学校 (The U. S. Naval Academy) に再編成されるに伴い、教育期間も従年の5年から4年間とされている。

約40万坪の広大な敷地の中に、石造りの白っぽい大きな建物が整然と並ぶ。そうした同校のたゞずまいは、どうしても江田島の赤レンガが脳裏から消えない私を、一瞬違うところに迷い込んだのではと思わせた。ゲートを入り、左右のスポーツ施設を通り抜けた先に訪問者センターがある。その周囲に海軍ジェット戦闘機・ミニ潜水艦等が置かれているのを、さらには構内を行き交う制服あるいはスポーツ着のキビキビした動作の若者たちを見ると、やはりアナポリスなのである。訪問者センターで1人2\$のウォーキングツアーがあることを知り参加した。ネイビーブルーのブレザーに身を包んだ元気なおばさんが案内人である。

『経営と人材』これは永遠のテーマである。また戦略的情報システムという言葉にみられるように、経営と戦争に類似性があるが故の研究は、現在の厳しい経営環境の下で脚光を浴びている。その代表例が、野中教授等による研究『失敗の本質』といえよう。そうした研究で『戦争と人材』、特に指揮官のありかたが取り上げられているように

思う。私は先の大戦に参加し、乗艦をハルゼー提督指揮下の艦載機に撃沈され、レイテの海を泳いだ経験を持つが、以来敗戦の要因の1つに人材、それも指揮官の育成方法・機関になかったかと考え続けていたのである。晩秋の構内を、落葉を踏みしめながら歩く。写真撮影は? の問いに、お国と戦争しているわけじゃないからOKよ! と案内のおばさん。

現在の在校生数約4400名、内女子学生は10%である。最初に訪れた建物はLEJEUNE HALL (スポーツホール) である。同校のスポーツはその実力で名を知られ、ホールの2階回廊には全米カレッジ大会でチャンピオンとなったチームと個人の写真が所せましと掲げられている。BAN-CROFT HALL(中央に Memorial Hall, その両翼が士官候補生 <midshipman> の寄宿舎)の玄関ホールには、ツアーのために最上級生の当番が待ち構えており、学生生活を説明してくれる。行き届いた配慮である。いかにも訓練で鍛え上げた引き締まった長身を制服に包み真摯に対応してくれる。質問にウイットに富んだ返事が返るのはいかにもアメリカらしい。Memorial Hall へは玄関ホールから階段を登る。横長のメモリアルホール正面の上部に“DON'T GIVE UP THE SHIP”のフレーズを刺しゅうした古色蒼然としたタペストリーが掲げられている。米国海軍のスピリッツはこの言葉に凝縮されているのである。ニミッツ、ハルゼー、スプルーアンスの各提督らがこのスピリッツで大和魂に立ち向かったのである。寄宿舎は1室2人8畳ほどの広さ。ドアの左がシャワー、

右がオープンな衣装箆筒。何種類かの制服，下着，靴，ライフル等がキチンと整理され所定の位置に収まっている。その次が教科書の入っている棚。工学・理数系の分厚いものが多い。この学校の専攻(Major)数17の内訳は工学関係(8)，数理・科学関係(5)，人文関係(4)の配分である。そう言えば，米国初のノーベル賞は同校の卒業生であり，教官であったマイケルソン大尉(世界で初めて光の速度を測定)によって，1907年にもたらされたものである。先のスポーツの実績と合せ考えると，文武両道が伝統なのである。その奥の両側にベッド。その真中に向かい合う形で利用する机がある。質素な中にもかかわらず機能的合理的なレイアウトである。入校資格を問われ，彼は自分はラッキーだったを連発する。その中で国会議員の推薦が必要なことを述べていた。この国は将来を担う若者を，政治家が責任をもって選ぶのである。単に学力が優秀なだけでは，その性格と能力が戦争の方向を変えてしまう指揮官の候補生たりえないとしているのである。政治家もこの崇高な使命に全力を注いでいることであろう。わが国のそれとの違いを思い知らされる。

このホールを出た正面はTECUMSEH COURTである。構内のはぼ中央，広々とした庭の先端で授業から帰る2人の女子学生と話した。2年とのことなので，未だ10代である。元日本帝国海軍通信士官と名乗った私にニコヤカにテキパキと応対する。女性にかかわらず軍の学校に在学する生徒特有の清潔感に溢れた顔つきである。これがここで確かめたかったものの1つである。それ次第では，女子候補生の入学許可は米国海軍の存亡に関わるのではと考えていたことによる。安心すると同時に深い絶望感に襲われたのは皮肉であった。今の日本のどこに，また，どうしたら10代の女性にこのような緊張感のある表意をみることができのだろうか。COURTの南側に美しいステンドグラスが印象的な荘厳な教会がある。礼拝

堂の椅子の前のポケットに分厚いバイブルが納まっている。決して新しくはないが，万遍なく読まれていることがわかる。この他にも教会があり全部で5つだという。

物量では太刀打ちできなかった戦争であった。その意味では，ミッドウェイで機動部隊が壊滅した時点で海軍間の戦争は終わっていた。それから終戦までの戦いをなぜ続けたかは問うまい。しかし，それまで戦争を戦訓として，戦略・戦術が転換改善されなかったのはなぜなのか。江田島とアナポリスを対称的に位置づければ，後者がフレキシブルな発想がよりできる士官を育成したということだろう。神への敬虔な気持ちが揺るぎない価値観を植えつけ，基本を尊び，それ以上に応用的な思考を重視する姿勢が，教本にも訓練にもない状況の下で判断できる指揮官を生んだのだ。

経営を取り巻く情勢は変化に富み，停滞を許さない。経験による判断はむしろ誤ることが多い。アナポリスの風は私に対し，危機管理に優れた指揮官の育成が戦勝の要諦であることを告げている。構内の大きな落葉樹は，過去を振り返ることではなく，現在とそれに続く未来に立ち向かうことだと囁いている。きてみてよかった。何か吹ききれたのを感じた。教会の近くのPREBLE HALL(図書館)の一部は博物館になっている。その中に決して忘れることのないニミッツ，ハルゼー両提督の胸像があった。レイテ湾の海戦で人生最大の試練を与えてくれた相手である。平静になれないはずなのに，連れに促され肩に手をかけ写真をとる。先ほどの風と樹々の囁きの中で古き戦いに完全な別れを告げていたのかもしれない。

わが社は複合経営に向けて，新しい挑戦を開始している。道程は険しいが，豊富な人材がわが社の誇りである。攻撃的で，勝つ意思(will to win)をもつ者を先頭にするすることで，道は自ずと拓けるものと確信している。